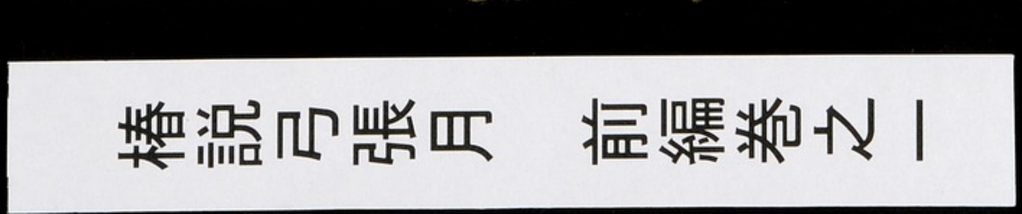

KODAK Color Control Patches
© The Tiffen Company, 2000
Kodak
LICENSED PRODUCT
Blue Cyan Green Yellow Red Magenta White 3/Color Black
© The Tiffen Company, 2000
KODAK Gray Scale
C Y M
Kodak
LICENSED PRODUCT
A 1 2 3 4 5 6 M 8 9 10 11 12 13 14 15 B 17 18 19
0 50 100 150 200


椿說弓張月 前編卷之一

爲朝外傳弓張月題詞
錦刀劍戟三千隊鐵馬金戈一萬重斬將
入堅人莫敵應教冠者顯英雄
射柳穿楊藝術奇保元敵將竟難支駈兵
入陣山川暗斬寇歸營日色低
錦袍金甲黃驃馬玉帶銀盛素線縻腰下
雕弓頻挿箭手中鑽鐵利鋒刀
日出扶桑二丈高金蘭何處匿生逃男兒
末遂平生志磨損腰間帶血刀

愁多不忍醉時別想極還尋靜處行誰遣
同衾又分手不知行路本無情
一語相歡利斷金能軍到今識君心八郎
廟食東海嶼猶羨當年德澤深
衝突艦艘勢若潮一時軍卒盡流漂可憐
裂女嶋中骨猶帶寃聲湧怒濤
孤嶋猶存戰血紅當年豪傑總成空客舩
于此重嗟問惆悵西風夕照中
仰首乾坤一笑頻相逢夢裡指行津鴈鳴
雲霽幽魂散山驛依然物色新
驍勇爲公武略奇鎮西士卒望旌旗不勞
長箭英雄服千載功勲播遠夷
殺氣南來戰胆寒征雲冉冉蔽空山英雄
預定驅戎策談笑斯須破敵關
琉軍戰慄和軍營滿谷連山遍哭聲兵刃
相迎一夜殺平明流血浸空城

鎮西八郎爲朝外傳椿說弓張月前編目錄

第一回

信西博覽好學非常

第二回

迷路止狼戰

第三回

山雄喪首赦主

第四回

老猴登塔辱主

第五回

白縫風流操女兵

爲朝勇敢伏九州

伴舍勸猴酒

重季死軀全珠

病鶴出籠答恩

信西性達射法

單騎南來一千里。將軍端的建功謨。虻人無阻相迎處。筥食壺漿滿道塗。

士卒長驅帶羽鵰。爲公向處將夫驍。洲民仰帝如湯禹。綏球陽聞本朝。

岩

文化乙丑年冬十一月飯台曲亭主人書於著作堂

第六回

紀平治獻計說地理

第七回

紀平治逐船飛鐵丸

第八回

寶莊嚴院御曹司示強弓

第九回

野風陣没開活路

第十回

爲朝單騎走江州

第十一回

寧王女饋芋告窮苦

第十二回

野加世駭馬噛捍棒

白河山中八町礫悲別離

八代殿戰當飛矢

藤市認馬到北濱

石山温泉武藤太責舊主

觀音寺村白縫女殺仇

第十三回

爲朝被配伊豆大嶋

琴彈神社武藤太逢美

第十四回

籔江饋粮憐配軍

第十五回

白縫汲潮志渡

通計一十五回

前編六冊目録畢

後編六冊

嗣出



瀬をはやみ
岩にせかるる
滝川の
われても末に
あはんとぞ思ふ



崇徳院



淡路島
かよふ千鳥の
鳴く声に
いくよ寝ざめぬ
須磨の関守

白縫姫

八町礫紀平治を夫
（そうぶのいしぶみきへいじ）

なのりて袖も
（そで）
めもふられぬの
ハナちる川も流せ
（ヤ）（ながせ）
まくび哉



八代婦
（ヤつしろのおんな）

やつしろのおんな
水をみてる
（みづ）
人のうき名をそゝぐ
（ひと）（いけ）
のみづ





籏江少女
見へのまゝを
このゝぬ分を
おとろゝ浦風に
ゝゞせる髪乃
数なゝも
のも



虹陽寧王女
おゝみそぢ
のゝの筆乃
ゆよのおゝ
森の房

ひさかたの
あまつそら
なるかみ
かをそふる
ものくるに



あとをとぶむ



源為朝

この書保元の猛將八郎爲朝の事蹟を述その誣唐山の演義小說よ倣ひ多くは憑空結構の筆よ成阮者理外の幻境ふおおぶそ〳〵可あり。爲朝琉球へ渡りのひしよ說原何の書よ出るよもそを考ふれよも神社考よ云爲朝八丈嶌より鬼界ふ行琉球よ至り渚嶌祠を建〳〵島神よそといよ寺嶋かれを遁出〳〵琉球國ふ到て魑魅を驅〳〵百姓を安〳〵と洲民その德を感〳〵圭よせり。爲朝逝去のち球人祠をそて。神號〳〵舜天太神官といふよそり。愚按まそるみ保元物語よ爲朝嶌よ干自殺のるを載そて。琉球へ渡の說多。彼說をあまりのいまさ何よ据よを詳よせそて今軍記の異說古老の傳話を合せ考。且狂言綺語をりくこれを貶ふ。事はその時代を考ふとも文はる局山林の口氣を脫まそこれ婦幼耳目よ解易らんご爲あり。画も又ちう好古の君子幸よ怪こうふるまれ。

鎭西八郎爲朝外傳　椿說弓張月前篇卷之一

第一回

東都　曲亭主人編次

信西博覽韓非を好爲朝稟性射法ふ達

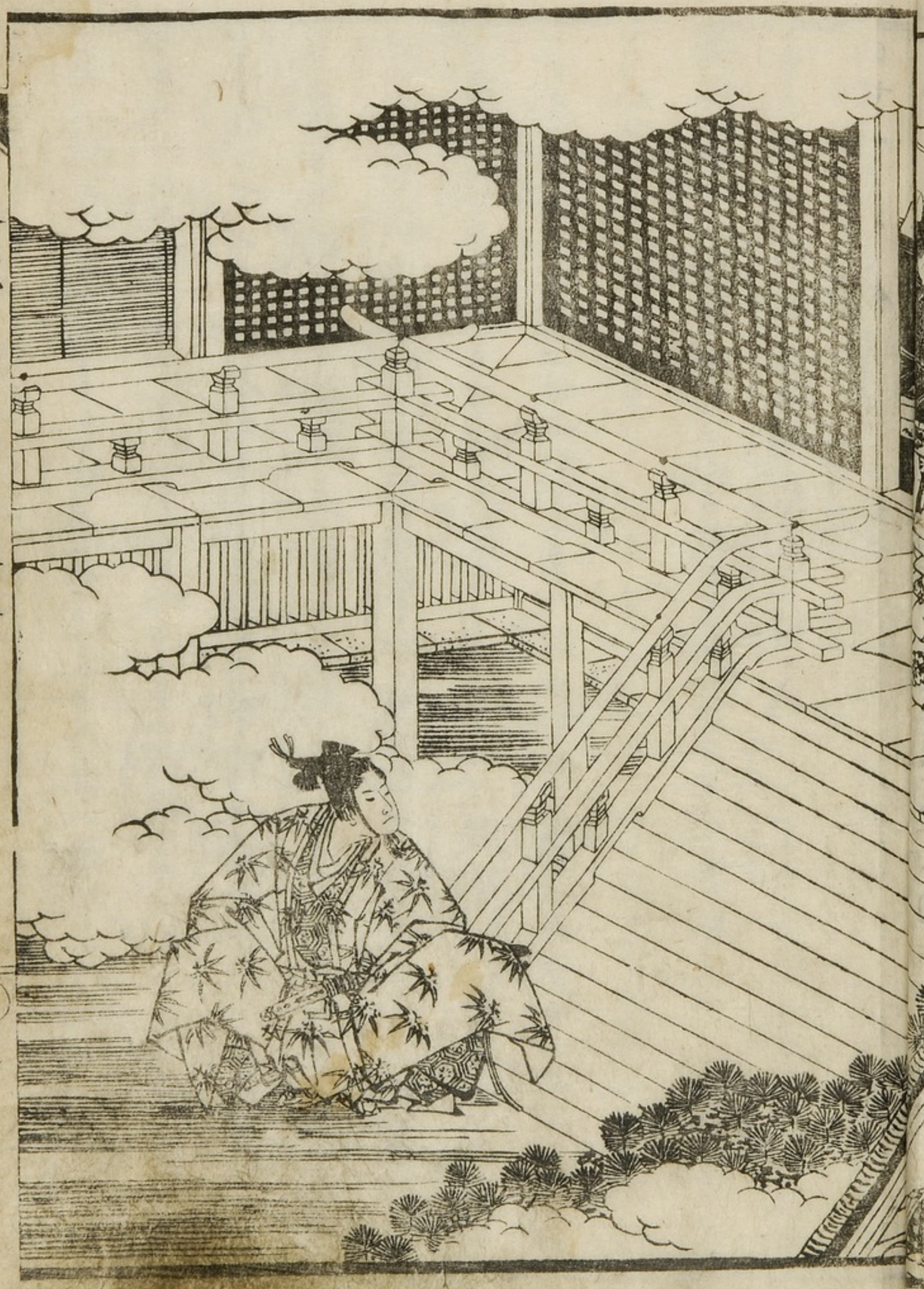
清和天皇七世の皇孫鎭守府將軍陸奥守源義家朝臣の嫡孫六條判官爲義の八男冠者爲朝よそあへ。智勇無雙ふ〳〵身の丈七尺豹の目猿の臂。膂力人よ勝ま〳〵九石の弓を曳矢纏早のま〳〵煅煉なり。さまで天性弓馬の妙奥を極むべき人もやありんはれおふ〳〵ふまの肘馬ま四寸伸〳〵。矢束を引よ世よ超つ初きよりその見識卓〳〵。鞍の兄弟も及を垂そ。ようび已ご隨意拳動ふる。時よ近衛院の仁和元年。爲朝廿十三ふよなりひ〳〵形狀尋常の壯

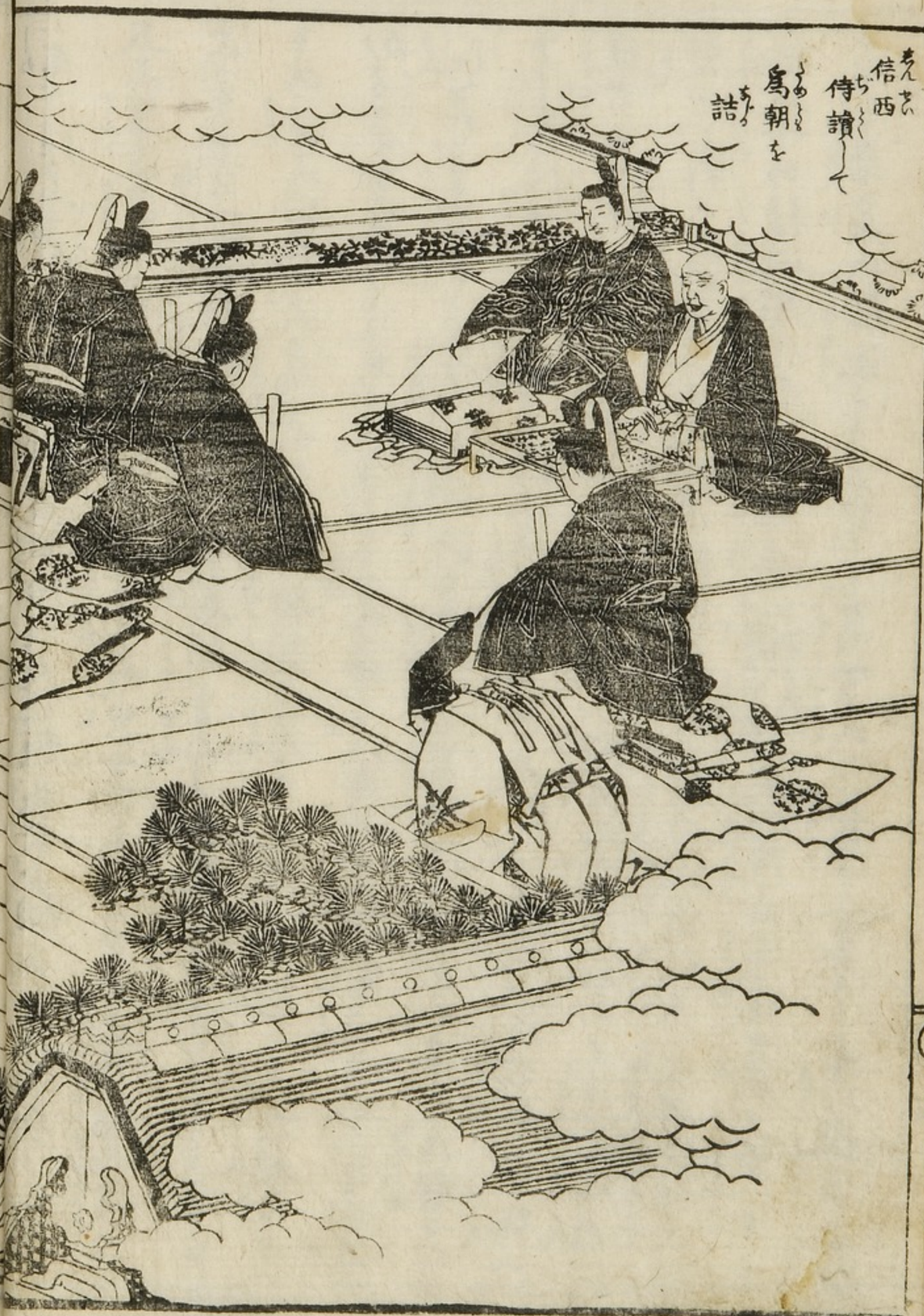
らを夫も家らそ久後いうあるものをうなき人彼ハこゝ児なゝ〳〵いと勇〳〵しきものゝ〳〵父爲義も生平よ吉を掃〳〵驚噪一ゐるとぞこの時鳥羽の上皇諱ハ宗仁そいぬる保安四年正月九日宝算二十一ゐて御位を第一の宮顯仁王よ傳人多〳〵治兼元年六月九日ゟ追號あり〳〵崇徳院ゟ鳥羽上皇ゟり制度一ゐひつゝうる保延五年五月十日美福門院の御腹よ皇子諱ハ躰仁近衛院ゟ誕生ありしゝ上皇猶よ慌びむほ〳〵ゐ〳〵春宮よゝてまかせ永治二年十二月七日ゟ譲位ありて崇徳院ゟ天子の位よ即まつらせ先帝ハ徳を以新院とそ申ける是ゟ上皇の御ゝうより生れ給へ新院深も推辞ありけるゝ共世の人ハ〳〵恨こもぼ〳〵ゐ父子の中も昵〳〵ゐ宣ふ也ゝ是よ依ゝ御位を去りなんぺ。さゝゝと推量まゐらせなゝ。代謝世のあひ〳〵早晩新院のおはしますべ。

かゝるほどよ鳥羽殿ゟ俄よ人〳〵おく〳〵公卿あまた宇治左大臣頼長公少納言入道信西なんど僅よ五六輩よこそ武士ハ六條判官爲義父子のこと〳〵り慰めなりけるとぞ聞ゆる。

去ほどよ鳥羽殿よハ日〳〵よ軍兵を召集めらるゝ由聞ゆれバ新院ゟも御方の軍兵を召集めらるゝ由聞ゆ。

かゝる





きそ信西侍讀して
ふみ朝を
ちゃう詰

この人博学宏才にして、緒道ふ達せり。その妻は雅仁王（後白河院崩じ給ひし）の乳母なり。ゆゑありて上皇も二なきものゝと愛おはしまして、朝政をさへ預り行ひ給ふよし。その職よく堪うるにこそあるべけれ。かゝりかゝる申韓の法を用ひ、賞を軽しく罰を重くし、動もすれば親疎よりて、恣なる公卿人の怨嗟、日未だ一日もやむときのなきまでに、上皇新院御父子のはかりごとまで白河殿に洩聞えしかば、新院のほゝゑまれしより、後もよくなりぬや。潜に源平の武士を御門をつけ給ふ。これ古の強弓の誰なるゝと問ふ人に、信西が稟申せし本朝その人よとぞいへる。古の強弓の誰なるゝと問ふ人に、信西が文武の古實を答へしかば、いよ〳〵感じ給ひぬ。信西よ文武の果しこの二人よ不如ゐんと答へしかば、いよ〳〵感じ給ひぬ。又今の世ふたゝびと仰ぐべき安藝守清盛兵庫頭頼政いづれも兵あるの者爲朝といふありのまゝにいかゞる席よりも出でゝ、新院おはしますの後の人あり。こゝおはせを爲朝聞れば、意ある声を發し呵ゝと冷笑へり。信西倩ゝこゝを不敬なりとおもへども、誰やと問ふに、御免や蒙らんねどと今日の講釋を好なごとに彼もかくもよそ潜より召倶しくも回答のしぐさ信西やゝ座をもとめ御階の下より立ちそ爲朝の面をうち瞻つゝ、この小冠者重疊やゝ異相なり。年もいまだ十五ばかりなるべきが、かくおびたゞしきものゝありて。玉座ちかきをも憚らず愚老を嘲弄するとは苦しからず。問ふことを爲朝の騒ぎたつる気もなく、世の人の言をよく通憲入道は博士よおはせと親疎より、つゝしみ断よ私ありといへりしが果して清盛頼

政と宣ふ。御前に候ひける人々、もつて噴飯の至りなり。幸ひにて朝恩に浴するのこかくの如くに候ふ。あが仏をするものよ。仰せられし。愚父の為義が十四支の時勅を蒙りて、美濃前司義綱を攻亡し、又十八箇の大衆朝家を恨み奉りて、攻め上りしかども、忽ちに打ち負けて、降参せしかども、俄頃の内に軍勢も数千騎の大衆を退けひとえに勅命に従ひ、数千騎の大衆を退けひとえに勅命に従ひ、栗栖山より馳向

をとらず。百万の強敵を退んるが如く。勇み進んで。信西が前に立ならび。呆果たる有様。横より裂んとしていへいるうちに。琢磨の功を積ざるその極まで至りしかば。縦いその才識のうちより習ひ得たるも。僅十餘年よるをば出ず。思へば悪木偶なれば。彼を射んと欲せば。我を射んあんまで。蒲衣八歳にして舜の師となる。矢を取るべきやうをいへ。為朝父伯益五歳にて火を掌る賢愚巧拙八年を論ずべからずといふ。矢継早にも仰せ射させ給へ。大悲の智恵の矢なりとも輙くとるべからず。よく射るの父よく防ぐといへり。今ところまでは。懲さんとや信西もたゞめ給へといふ。為朝さらば屈しける気色なれば。憤ほどの威勢の程を示さんやもあらんと。

をとらず。百万の強敵を退んるが如く。勇み進んで。信西が前に立ならび。呆果たる有様。横より裂んとしていへいるうちに。琢磨の功を積ざるその極まで至りしかば。縦いその才識のうちより習ひ得たるも。僅十餘年よるをば出ず。思へば悪木偶なれば。彼を射んと欲せば。我を射んあんまで。蒲衣八歳にして舜の師となる。矢を取るべきやうをいへ。為朝父伯益五歳にて火を掌る賢愚巧拙八年を論ずべからずといふ。矢継早にも仰せ射させ給へ。大悲の智恵の矢なりとも輙くとるべからず。よく射るの父よく防ぐといへり。今ところまでは。懲さんとや信西もたゞめ給へといふ。為朝さらば屈しける気色なれば。憤ほどの威勢の程を示さんやもあらんと。

うんつと立あがり。誰か弓矢をば挟むべきぞ。是へ参れとぞ呼はりつる。回答一て式成則負とるまじきよしをぞ申ける。信西是を聞。如此くの者は。この二人の瀧口ハ原白河院の武者所あり。的の上手とぞ云ふなる。この小冠者は一矢つゝ射させよと仰あり。後瀧口よめされぬ。あの時二人五寸の的を給りぬ。それ第二の的を射おとさゞらんは。是既に養由に等しとぞ人々誉のゝしりける。為朝縦八六の臂ありともこの矢面を脱るゝ事あるべからず。今年老たれと気力ハおとろへず。左府頼長公も。今ハ人ともおぼえず。信西に対し。為朝の形容ともおとるまじ。信西あはいと仰ありもつゝ。又為朝我

うんつと立あがり。誰か弓矢をば挟むべきぞ。是へ参れとぞ呼はりつる。回答一て式成則負とるまじきよしをぞ申ける。信西是を聞。如此くの者は。この二人の瀧口ハ原白河院の武者所あり。的の上手とぞ云ふなる。この小冠者は一矢つゝ射させよと仰あり。後瀧口よめされぬ。あの時二人五寸の的を給りぬ。それ第二の的を射おとさゞらんは。是既に養由に等しとぞ人々誉のゝしりける。為朝縦八六の臂ありともこの矢面を脱るゝ事あるべからず。今年老たれと気力ハおとろへず。左府頼長公も。今ハ人ともおぼえず。信西に対し。為朝の形容ともおとるまじ。信西あはいと仰ありもつゝ。又為朝我

對ひ〳〵そのものを將て退出ぬへと仰ける。このときまでも爲義朝臣ハ默然そ〳〵居たるが〳〵こゝ爲朝既ニ十三ニ成きといふもあるに。陣ニ臨ミ〳〵後をうしろみまもる事斗ニ彼一人ハ惜むニ足ずとも恨〳〵ハ源家累代の武名を汚しのうん社只管御免を蒙り〳〵彼ニ隨意あさしめいろんと宣へハ。かゝる人ハさもかくもと仰ける程ニ爲朝ハ欣然としく信西對ひ式成則負ハ左右の弓そうこれ矢をとりもたせ。ハうと命ぜ地ニ後をうけ足下ニ許を我又よ〳〵その矢を取ハ何をうのうりんぞといふ信西令笑〳〵ゐ矢を取ハこゝこの首なうとも進てまゐらせん。信西ハ仏門の徒ニ只今切ハ報ひいかゞと欺くを。爲朝ハ耳もうけず。廣庭ニ走りひり矢ごろをとうく立ちる彼式成則負〳〵老功のうのなれバこの光景をうえ悪きほ行ひもも勝れり。行とせんと躊躇を信西端ちう〳〵立出〳〵とく〳〵催促ニ二人も今ハせんもべあく。豫〳〵二の矢あるべしと定めふれまゐハ矢二條をも挟〳〵立むう人ハ君ハさ〳〵當座の人〳〵まよ河を隔り。今の爲朝が命ハ日數もう露よりもあ程消やもうべしと呼れ出るか〳〵式成ちよ矢つゞひ滿月のごとくに引ちり矢声をうけ〳〵切〳〵發つを爲朝雖ゐて一丁ニ取る神もあれを足をも雖ゐて受とめうこハ射損せ一打をしさよ縱射ごろもさそふ至ごともやハこの度ハ取られじと。ゐ人育〳〵引ちり。ゐぞ〳〵透間を窺

のちの冷泉天皇 式成親王 則員 烏帽子 朝を 射る

くようの引摽と發つ矢を一條ハ取るよ間あられべ。
口りく楚と食笛しう忽地鏃を嚙碎きつその疾て陽炎れ登るごうさいとく。
雷電の閃よ似く。人間技ともおぼえねいこれをこるりの醉ぅぐとく。嘆賞あ
りて声ぐる得揚を爲朝ハ取くる矢を左右へ捶遣捨いてその法師首も
つくんといひもあへず階の上よ跳上り。信西よ摑こからんとするを父の爲義
押隔く。直よ撲地と衝落しぬ武士の家よ生れる身の偶矢前を避ぬるう
も敢めづくしとするよ足らず。志ううまでその身の秘をも顧ず。鄙陋の挙動
こハれなり。こハ漫しといひ懲しめふぞ。頼長公こそあらめとく。やよ爲義
いくかよ吹うそ。信西も又幼よとむべきよあらぬぞ。むうしぬうれ童ぬりて日れ
出没つきくその遠近をひつよれ孔子もこれを辞しかうしとぞ。今
通憲入道が爲朝を伏し給るもこれよもあら。今ハ是まぐなり。おのく退出
へと未ももはうまで草みも暗ぞ。彼是實まひうり新院ハ日来ぬ召こうの
あうく。左府頼長と潜よ相語ふひしが御簾の間より爲朝が光景を御
覧じく。彼ハ物の用よもうべきりのぐとおぼしくされば御感斜まぐほて。
ふうく稱ひしー祖よ。爲義も忝ざる面目をほどこしー。父子うもつれく退
き出ぬ。この時ようそ爲朝の名ハ。世よ高くぬえける。さまで信西ハ爲義
親子をいく恨こ。まぐく讒言しく陰んとこるう給よ保えの兵
乱よ及びく。新院ようもも爲義を召ぬ。爲義已こを切ぐと六人の
子どもをねく。庶身方よ参りこるの軍利ありしく。新院ハ讃岐國
山よ遷されまうこるよ通憲入道信西ハ爲義父子を憎むの余れば
あやこえくき死刑をやむおこなひしー。盤若野の五三昧よう左府頼
長公の屍を掘出く首を刎させ。爲義父子以下新院の伝身方よまう

よう一武士を搦捕せ。こゝその首を梟よりし惡報ゆやうりん彼信西
が中納言信頼卿と權をあらそひしより。いく祖もなく平治の逆乱起りす
の劔首よかるといふ天文をよく都を落田原の奥なる大道寺の坊よ
竊く。生あく土中よ瘞れしを敵兵探り索く掘出し。その首を取て
く六條河原よ梟てよう。宜なるかな信西が已を博士ありて人を拒。罰を
重くして衆の恨を顧ざりし。因果覿面こゝとこのころの人ゝまこ
とに罵てゝるとぞ。

第二回

路よ迷く狼の戦を止め
舎よ伴く猴酒を勸む

この日爲義朝臣ハ舘よゝ人ゝのやぞ。爲朝をちく招きゐ刃いゝゝれ
ば貌姑射の山の尊況ふも怕れも織素の手よありあく長者をも敬ま
ざく肩を轉せハ仏のぞ夫孝ハ刃を立るよあり一朝の爭ひ
その身を誅く。式成則負が前面よゝる牧人の行ひよ齊し。兵法よも
將驕るときハ必ず敗るとよりく。智あるりのハ爭ひまで。能のるりのハ誇ふすとそ
いふの。今日の動止ふ忠しやいん。向後をよく慎ひへと
教訓しまへ爲朝畏ゝく。父の命さるゆなれど彼通憲入道信西ハ賢者
ゐ仏る佞人し。その刃一院鳥羽上皇の寵遇を得く。當今近清院よ昵近しまれば。
他人ハとまれかくまま彼い世のまえを憚りく。新院のゐゝゝ人ハ疎うべよ。
さふまのくく親くまりつゝふるの城の志よあくまで潛よその光景をこ
まかせ怪くもゝるのあんまハ上皇ふ告まゐせん爲の間者かり爲
朝頂くこれを知るゐ在ふ。今日言を設く者奴を怒よせ。ふたゝび白河殿新院の御
所をへハ足踏もさせまじくこそやひりまのまく。いく信くもて私語るひちふ。

去べ一あり〳〵爲義又宣ふ。いふ〳〵官よ怕れよ。
いふのあり。信西ハ君寵を誇るのあり。彼りふ〳〵こゝ
彼ゞこゝすの舌ハ亡さゞるべ一ゝ。ゝ月明日筑紫の
旨なれ。音耗いまべ一ゝもそ〳〵蔭の
朝ハ父の氣父あ一きをこゝ。ゆ〳〵こゝび言ハをこゝ。詰朝氣毋ゟ須
藤九郎重季只一人を召倶一ゝ都の空もまこゝ果ぬ月も西へと入こゝなの
曉の星を載紀。そゝ弘紫の果さそ立つ。日數經ゝ豊後國ゝ
来まひ一ゝこの國ゝ名ゝる。尾張権守季遠ハ由縁あるゝ人なれ。ゆゑ
人をこのゝゝこゝえやゝ一ゝ立よりひ一ふ季ゟ遠易ゝうけ引ゝ養ひま
ゟせ一紀。そゝふ三年の月日経ゝ爲朝既ゟ十五歳ゟ学ゟゝ
ゝ智勇抜群おりゝ一ゞ。経傳兵書ふゟひを耽ら。又折ゟハ弓矢を携

未綿山 府の西あり 又 ゟ狩ゟしまこゝ。有一日只ゟりゝ山ふゝくゝまけゝりゝ
 冊波と同名あり
路ゟまこゝひ行こゝもゝ舊の山路ゟ出まのゝ
のゟ二頭ありて鹿の宍を爭ひ噬あふゝく生死をえ一ゝ。ゞ。互ゟ半身血ゟ
塗れ勝らまゟ芳らまこゝえ一ゝ。ゞ爲朝まこゝ停立こゝ。つゝゞゝ。今
の世の人こゝ。ゟ。笑の甲ゟ刃をかゝ一ゝ。利を又ゝゝ親疎をえゝはこゝ官位の
高ゟを猜こゝ食祿のわゟをも爭ひ父子も讐敵のごひをあ一。兄弟鎖を
削るこゝ。この狼ゟ異あら。ゞ。今この獣のたゝうひハ我ゟ觀念を勸るのなゝ
ゞもゝ。さ一ゝび助けまんとこゝうこゝもそこゝ對ひゝ宜ふゆゝ。汝おいこれ
勇き神あり。今食を爭ひゝ。互ゟ痩つき傷むのあゞゝれ労せをしゝ
両あゞゝ獲んも容易一。夫食ハ別ゟ求るゝもあるゝ。生こ一活りの一
ゝび命をうりおハ来るゟをうりん。ゝ退けよゝいひをうり。ゝの末を挿


爲朝幽谷ゟ
狼の戯を
看

入ㇳ〳〵一反丁とゝねる人ハ彼二ツの狼ハ大力の弓杖よ支ふ多左右へ撲地と顛
即ㇾ〳〵。ふゝび挑ミ戦んともせず流ゝ〳〵舞血を舐あひ〳〵忽地睦ㇾ〳〵ㇾ又ㇾ〳〵
ㇾ〳〵且〳〵ㇾ〳〵この狼鳥朝を熟ㇾ〳〵ㇾ〳〵ㇾ〳〵

よろづ矢劔戟を用ひをのづから礫をもて
八町の内よ鬼を定めて撃ちしに疾く鳥勇き獣といへども打殺さざる
いふもなし。こをもて人口順よ渾名して八町礫紀平治太夫とぞいひける。
それ今かく村落ありといへども耶書雲の志なきやうもあるべきにもあらず
君が文武の道よ富んで人を愛しものを仆し渇を医しのり
つとめて身賤しくそれが見えまねをもするようもあらず意さてもこの深山
ふかく尊容を洋上なりしよ僥倖ありこれよますらをのいうんといへる。
爲朝ゆゑひくさてこの狼どもを怕れくもをるぞりしよ紀平治がありをも
くなりぬん。それが彼が礫よ妙ある中よ感じおぼし。叮嚀ふ
回答しく路よ迷ひしる中よ狼の来などのまぐべくおうりの人紀平治が顧
嘆賞し君が徳既よ禽獣よ及ぶる。いとくも有かくも賢くおかしと

よ後日路よ迷ひまうで。さこそ餓ゑ
り茅屋を厭ひまうでそ立ちよりて。甜ひまうといふ固辞うしく打つ
ぐちく麓のうえ赴紀多人が彼二疋の狼し後方よつきく門まよりり。
紀平治がありる堵折戸をも押ひらく爲朝を入まゐせ妻を
ようひくあるじのうちを語り饗せしきの
あれば栗の飯よ鮎のもち焼とり添えく。爲朝よまもめ進ずまるぞ。紀平治が
草鞋脱まてく裡面よ入り。これ莉婦ゆく名をば八代とぞいふ。
紀平治が又一飛
の酒をとり出く。爲朝を管待まつりまゐくまれば。兎を喫のち蒲萄酒よ似く
ほんに黒いこれのをかく醸せしものゆゑ同多人が紀平治荅く。兎を山中
稀よあるところのものゆゑ。猴酒と名づけん秋の末よまりく。猴も菓城

そのころ
八町礫紀平治
禹朝を
待

貯人が爲よ汴多の了集ゝ古木の虛巖の凹なるところなどよ荒めもくよ月を招ゝその菓悉く潰おのづゝ酒のごゝふありてれも山を家よ手るゞれもをくいつゝるとあ紀をそれゞ近曾又出て汲ゝ持入りゐとゝ爲朝なをひゝ営をうち山中おさするものありとゞつれと都よ生育れゞいくゝるゝゝ。それゝゝなさすゝふつぞへ爭かゝる管待ふあゞきと宣へゞ紀平治も笑へよ入りゝ。そ日もぞゝ勸め進ふせゝるゝれ忘ゝるゝそあれ彼おもさゝゝ餓つゝあとゝそりこちゝ門方よ出ゝ二疋の狼をはびつ。切ゝる鹿の股を投与ゝ其妻の八代かこれをゝ煮ゝ大よ醉るき怕ゝを紀平治うち笑ゝく緣由をおゝるゝぶそ。ゆゝやゝこゝ汲安堵ゝりかゝゝ紀平治ハふゝひ舊のごとくゝ。四表八表の話の序ふもぞゝ。兵法をす論せゝゝ爲朝の說ゝふ所悉ゝゞさする処ふ出ゝ。その方測ゞゝ又えゝ人ゞを傾ゝ感伏ゝ遂ふ主從の契約をゝつこのおゞゝりゝて日も既よ暮よゝれゞ爲朝へ別を告ゝく立入ゝんとゝゝふおゝも乳母子須藤九郎重季ハ主君のゝり庭おとよゞりゝく。蕉火ふりてゝゝゝ彼此を索ゝ。ゆこの処へまりゝそ。爲朝ハ重季をゝゝ紀平治ゞ說示ゝ人ゞハ重季も夫婦が厚き志をよろこのゝえ主の倶ゝゝ立ゝゝる狼のごゝなどよ彼狼ハふはその後方ふもゝこゞ来ゝ。退ゝ遣れゞもゞ帰ゝあゝぞ。この夕より爲朝の住ゝる。子舍のほとりを去ゝてゝなゝれゞ。爲朝も又こゝを哀ゝ一頭をゞ山雄と名づゞ又一頭をゞ野風と號ゞゝ。ゝさるゞふ畜犬のごゝふゝぞありる。

第三回

八郎冠者爲朝ハ。ゝゞ八町礫紀平治太夫よ面あはせゝよふゝこれを山雄冠者を喪ゝゝ主を救ふ重季鯨を死して珠を全を

堂よ給こひ。常よその家ふ交かく。彼とともよ狩くひし。更ふ外を求あらぞ。その山よおふ日ハ彼二頭の狼れうもちうるふひ一頭を牽くりひ。おのづく獵犬のごくよく猪鹿を追出し。多くハ主よまを下さぬおの主すづこれを囓ろしくく献らせくりあるよき須藤重季主を諫くく亶ふやう君ハ正しく清和源氏の嫡流として大國の守ともなりあふべき人の朱くなるといふ常言ふも恥多人うと面を犯しくやせむとハ。爲朝舎笑くく汝がいふ所理りなり。志のあれどこれ今さまでら人とるるくいくも志を移さまあらぬを攝守季遠をその器量狹く賢をかれ己ふ勝まるを諍りのもくれくく彼が養ひを得くく嫌忌の中ふ月日をおくり。遠き慮なきこときハ禍蕭牆の下より起らんこををりて後日山よ狩くし料を求るの狀を二ふもりのハ季遠ら心を安めん爲よりくよくう獲る獣ハ。紀ふ治よりくせくく彼が生活の助よりる道ふもてふ小利を貪り山獵をりくく身の樂くせざるのを考へくとなりつ。爲朝既よ十六歳今ハ一個の壯夫よなりりハ重季ハこれをえて。都よやりはきハ除目行くよ序ふ官人の数ふも入りるべきよこの邊邑ふさまよひくく家ハやうやく數間よるまで住むハ主從二人ら懲しくびく家信もなえまらぬ大殿も心をろ

はよ〳〵と倥きまふ世をうむ滅患の徑こそ有うこそれかく〳〵爲朝そ
ある日朝まだきより弓矢を携乍山雄と一頭の猴を牽て未綿山
へ趣んとするの〳〵須藤重季主の神の袖を引て〳〵それ〳〵前夜夢見もあ〳〵
と後も何とやらん胸うち騒ぎ〳〵心持穩おぼえも頻〳〵かりよの山猶を止
うとひもをつよくするよ爲朝うち笑ひ〳〵夢のい五臓の労よ成〳〵と
かるの狼讒人い婦人のうへよあるべし汝公を安〳〵てよ〳〵留まらせよと
宣へ重季又稟やういまし〳〵の人も事ふ臨まい懼よといへり。されど止ま
るべくもあらばと重季をも召倶〳〵連てぞ拒んとれ共も未まよと仰ら
れ〳〵ぬ火よ路をてらし主の倶〳〵立出りさて爲朝主従い未綿山の麓
なる紀平治が家ふ立よる〳〵彼をも伴ひ〳〵て音するひと人い代立
出て〳〵まづ湯を進せ夫紀平治いとの暁よ山へとく〳〵出ぬされど出ぬ
もあよぬよ追蒐るて山の半腹ふ追つ記ろんといふまゝ急ぎ立て。
主従其処を走り寺足よ信せつ山ふ〳〵こまけ入てまよいまだ夜も
あけざるよいゆく〳〵さ記暗く〳〵逐ふ紀平治をこんとそ。あまりよ疾走
り〳〵疲労のひとしぬうち〳〵る楠の下よ立より主従揃よ尻をうけく明
まるまで〳〵をまちまるよ品顧睡をなりよほ〳〵と周睦こののやこ
のく彼山雄一声高く吼主の行勝のそ〳〵を銜て引よられい爲朝
ほく〳〵べき氣色なれい爲朝結と肱を枕方を己くりのべと眼よ遮はそのもなし。
こへ山雄ふ戯てよとおほ〳〵く。又睡りのふ復いく吼〳〵て噛す
ほく〳〵べき氣色なれい爲朝結と肱を枕方を己くりのべと眼よ遮はそのもなし。
〳〵とふそ宣なるこの畜生ふ睡まる間を窺ひく咬んとするふ

こそさもあらばあれ目前の物こそせめといえども刀の柄を握りもち
まづ一睨つえいとおやしたる重季も
瘧のごとくに戦慄居たるが山雄の氣色のいと
二声三声忽地走りよりんとするを重季跳かゝりて切ふせ狼の
首鼈をとゝのえ楠の枝に因き懸つるに舞血さと溜りつ
頂の上より落る物ありて大地も揺と響くばかり主従ふたり驚き
怪と押明ればこの星の光りに眼を定めてえもいわれぬ蜂蛇の吭へ狼の首噛はさみ蜂
蛇はその半身は木にまとわりつゝ蠢くを主従刀を抜りもちて刺とゞ
刺とゝ輾くこと遥を殺すのひゝ烏朝ふゝく慚愧ーこの蜂蛇
捐よりそれを呑んとするにぞ山雄うちぐゝ吠うゝく裳を引
きつせをこゝに寝するうち一下さもむよ
刀も死もるといえども一念首ともでまもり
過てりくと宜へ重季はその面をつくゝと
いえりるはそれぞ一疇昔義ある
祥なりー。そも狼もゝ恩義を感じ。況ひとぐ一愚さよ彼今重季う一
獣もだにゝ。主を救へゝ殊勝なるまこ
却ゝ山雄を殺せるの。恥ゝも辱ゝ
ぞ。烏朝はこれを勸彼を哀ゝく已
ゝりゝ雲起りさしも今ゝく晴ゝる天油然ゝく結陰風颯ゝ来
祇ゝあまこ時ーも三月のそらあれと電光閃なゝ閃き雷さへおごろ
おび振ゝく悟ゝり直み頂の上よ落もかゝるべき光景まこ烏朝もこ

山雄音を
喪ふ
蟒蛇を
噛む

雲間をうち瞻仰ぐに蛇數百丰を舒ぶるときに刃の中より珠
あり。龍王をあざむくにあれば。その珠を取らん爲よまづ雷公を遣りて震ひ
ころばしめ。そのまこの蟒蛇より珠あらば。
つと回答へ。彼蟒蛇の吭ばかり重季試み裂きて
みるに。雨ふり盆を覆すごとく降なり。雷の鳴ること
雷公の隨かるるもあり。射ても
退きてもおやまざる。須藤ら西よりきたる
を尾のあらばきて裂くにそれどころかおもなし。珠は頭のうち
やあらん。力をうるはし。頭のはを剥ぎ腮の下を探りて骨の
間より物こそあれ。もとより是ならんとて引出さんとするに斬ても四方晦瞑
とて。一朶の黒雲須藤が上を掩ひ累り。一声の霹靂天地も動くばかり
鳴落ちを爲朝より引ずり漂と發つ矢少しまごつきもせず
ふ雨止雲もさりて旭東の岸より昇まり。爲朝ら重季ぞやいと
なくも暗くも待ぞ走りよりて
身一全身黒く黝く。肢體をつづきたる所もあれども。刀さへ放さず。尤
まへ血よ塗身なれば。一顆の珠を握り持て死るう雷公にてより昇りて
とこそそ。十圍もあまる楠を斧もて割くに。楠より根の際まで二
片よ別れ。爲朝はそれよ眼もそめられず。只管重季が横死を
哀まこころれ血氣の勇よ湧て。求て危きを瞻を両度まで及び前ふ悩
む山雄を殺させ。今又須藤を喪へり。縦百朋の珠なりとも一人の家隷
ふ換べきや。汝ら羊未憂ふ冊ぞ。信やのみれば。忽ち泓
かくひたり。仏ありともなく。愛ふ。愛ふ。偉きかな。爲朝祥し

木綿山ヨ雷公を重季を撃

ー。さいし人日来いかくさう勇者そも見えぬふその名雷公よ撃るとゝもよくその珠を全を彼薗相如が忠勝まりさてよーまきし技をもつうな
と後悔ありく。公卿みよのーこゝろそ。かくいへ須藤が志を他ふせーともぼーとも
くゝ。おのく彼珠をとりてえまみよ晃こゝろとこゝろ明月のごく世よ類なき名珠なり。
浩然よ前面の崖道よりいくゝ滝まきりのありり。誰そとえの人へ日足
ろくゝそきへいぢ
八町礫の紀平治なり。彼も他曹司なり。これ忙ーくー走り来ゝ須菟が
らいー。雷光。山雄蝉蛇の光景をうえくゝ大よ驚記。まづその故を問ふかまれば。
爲朝ハ愀然とゝゝ涙を含こ一五一十をねごうりふそ紀平治ハすんくゝ
弘るくゝふりく重季が死を哀こ又山雄を最惜つ。かくーくゝ楠の根を
掘穿くゝ重季が屍を埋めくゝさて他をう標ませんとふ
爲朝まつゝ大なる二ッの石をいとゝ軽やうな持来りひくゝ墓碑とーり。

亡魂生天脱苦ふ樂と念ーつ。紀平治ともよ山を下りのふよ細き渓
川を隔ーむひの峯よりさーふる松の枝よ羊狩る猪のかくりくー。
飛んとまれどもえのうを只管羽くゝ煩悶る事えなうを爲朝
遥よえまへーくゝ彼鳥の足ふハ糸などを著るりのふんうその緒
のそーの枝ふまつりくゝ飛もぐるふとゝ宜へハ紀平治も強ゐてゝ。さら
ばそれがーふ礫をりくゝ。打おとーりんとひつゝ寵よるを爲朝忙ーく押止
め礫ーくゝこれを打ハ。命立地よ後くゝ彼ーぞこれ傷のけうぬやうよ射そ
なのくゝ童季ふが供養よ放生會まするをえりくゝと仰も果をねゝ滅
ーくゝ丁と射ふよ落ハ忽地枝をえのれくゝ渓川へ落くゝーう尤哈
なくも死あごいぞ紀平治ハこの光景をえくゝ暫竹よま繰つき藤蔓
ふ携乃つくゝ渓底よ至り彼鶴をうき抱き。舊の岨方よーも

うへりこいふこと。この鶴いこく羽を損ひ一こえこく飛去こべきを見ま久まあよこを得ざりく足ぬさこゆうなる金の鏃を著こんこ。この鏃の枝こまつりこく引とあれこる矢。一矢よ射切のひこゝ轅く枝を放まてうこまひ志こるよその鏃のそこと二こえて鶴のほこりぬ落散まこるものを見こる黄金の牌みこくへいこれをも拾ひとりてひよこて彼牌を二せまみこもそ。康平六年三月甲酉源朝臣義家放焉と彫つけれ。からも驚きこく宜こゆこ。むこ一奥州前九年の戦よこ。遠祖頼義父子殿け逆徒を誅戮一のこくをりこく。ふこ一この事を歎きこのひ貞任宗任退治の後討とこころの兵どもう耳を刷こ一洛よのや一。六條坊門の北なる西の洞院のほこりよ埋こく上よ一宇の堂を建立一のこう。今の耳納堂これ。このこ由義家朝臣も彼地ふこく亡者追福のこめ戮の鶴よ黄金の牌を著こく放一ひこゝ。こゝ見もその一隻あり。康平六年こり今茲久壽元年ふ二八年。時ハ今三月ふ一こく日ゟ又けふハ酉なるまいこく奇一。この鶴足ふ牌を著られこく憂ともふハざれハそ。西海の果まこくも恐まりこく。乾坤ふ徜徉せ一ふ偶その鏃松が枝ふまろうこハ向の雷ふ驚きこく。この過をあこるこめ。これり一もこで過りるのべ。鶴ハ遂ふ死まべきを曾祖義家朝臣の神霊これをなほこく。この鶴を救ひせのふりのなること。一トさびかこと。又一こびいうれ一こく。縁故を説のへハ紀平治も奇異の名ひをる一。こゝびて鶴を扛抱こく烏朝を館まで送りまあ一せ。ゟこてこゞ家よ陸りるさる程ゟ烏朝ハ彼鶴をふこく勲て銘ふ養ひこ一まづこふ飼をふへ水をふのふいまご幾日もあふほ健みこりぬ是より先烏朝ハ彼日ゟ仕む子舎ふこりのふとゟこく。

狩りとぐるり一頭の狼野風とよぶるが尾をうち掉。端ちうう茅しげ。
仰とゐく哀れよおぼーく。ろの山雄が死るるぞも。人よりのいみがごくきこえ
ゐ人ぐ野風ぐこれをなもあくぐ。頭を低垂涙さーぐぐ。ふうく愁ふ事久
なり。この光景をこそふゆも。重季がいよ〳〵痛〳〵その夜僧を
むくく経を讀せ。かの男と山雄が為よ。なぐく追善の仏ろを修行志ゐ
まり。

寒山拾得